昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和6年7月1日発行 第48巻第7号通巻第562号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんぱくは創設50周年を迎えます

月刊みんぱく 7月号 2024

特集

夜店に行こう！

巻頭エッセイ ダースレイダー

乱世の先のヒップホップ

ダースレイダー
ミュージシャン、ラッパー

乱世、来たる。僕は最近方々でこう言っている。国内に目を向ければ、特に昨今の統一教会や裏金問題に象徴されるような政治状況は三国志の舞台である後漢末期の再来のようにも感じる。十常侍が宮廷で跋扈し、群雄が割拠する。黄巾賊が各地で蜂起して、董卓が中央に乗り込んできて、曹操や劉備が決起する、そんな時代だ。こう書くと秩序崩壊による不安だけでなく、新たな何かが登場するワクワクも同居しているのがわかる。乱世とは未規定で、良いも悪いも定まっていない状況だ。そして、僕は世界はそもそも乱世であり、秩序はその中で築かれた束の間の安定、混乱の海の中に浮かぶ島のようなものだと考えている。乱世来たる、とはその意味で振り出しに戻る意味合いもある。

国内から、国を単位とした国際社会を見ても乱世の予兆が広がっている。ウクライナ戦争、ガザ戦争、ミャンマー、南スーダンやソマリア、ハイチ。アメリカやフランス、イギリスの政治状況も不安定だ。僕は一九世紀に成立した国民国家を単位とした国際秩序がいよいよ崩壊せざるを得なくなっているのではないかと考えている。ナポレオンがフランス兵を率いて連戦連勝を記録してから、国民国家は国への忠誠心を国民のモチベーションにするという幻想に基づいて発展してきた。民主主義や人権といった考え方も国民国家を前提とした国際社会で受容されてきたわけだが、その中で僕らは中東やアフリカにおける人工的な定規で引かれたような国境線にも違和感を抱かなくなってしまった。ただ、その枠組みから外された人たちが存在している。パレスチナ人やクルド人、あるいはロヒンギャのことを考えると前提が揺らいでくる。ガザ戦争では欧米社会が掲げるリベラルな主張が誤作動を起こし、次々と二重規範が明るみに出ている点で決定的だと思う。

資本主義、そしてインターネットが導く先に広がるグローバルなプラットフォーム企業の存在も国民国家以降の姿だが、別の道もある。その一つがヒップホップだ。同じビートを共有しながら表現する。ラッパーがフリースタイルする時のサイファーは輪っかで出入り自由だ。去年誕生してから五〇年を迎えたヒップホップは今では世界中に根付き始めている。それぞれの地域の文化、言葉をビートに乗せることで古きを生かし、新しきを生み出す。国民国家的巨大さが瓦解した後に、さまざまなビートのもとに大小のサイファーが花開き、繋がる未来。

プロフィール
1977年、フランス・パリ生まれ。ロンドン育ち、東京大学中退。国立民族学博物館特別客員教授。吉田正樹事務所所属。2010年に脳梗塞で倒れ、合併症で左目を失明。以後は眼帯がトレードマーク。バンド、ベーソンズのボーカルとしてカンボジア、香港、モンゴルなどでライブ。自身のYouTubeチャンネルでプチ鹿島とのヒルカラナンデスや各界知識人を迎えたトーク番組を配信している。ダースレイダー名義の最新アルバム「ラップの鉄人」(2023年)。著書『武器としてのヒップホップ』(幻冬舎)『イル・コミュニケーション』(ライフサイエンス)など。2023年、映画「劇場版センキョナンデス」「シン・ちむどんどん」(プチ鹿島と共同監督)公開。

月刊みんぱく
2024年7月号

表紙
ラマダーン直前のファヌースの夜店。ファヌースとともにさまざまな電飾も販売される(エジプト ルクソール、2024年、近藤文哉撮影)

＊本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ
乱世の先のヒップホップ
ダースレイダー

特集 夜店に行こう!

2 **子どもだけの夜遊びも許される ホーエーとヨミヤ**
厚 香苗

4 **金箔を仏像に貼り、娘を水に落とす**
津村 文彦

6 **ラマダーンの絢爛たる夜と日常**
近藤 文哉

7 **金魚救い**
新海 拓郎

8 **イスタンブルの露店に咲く花々**
岩谷 彩子

10 **夜市台湾**
王 韶君

12 みんぱく回覧板

14 推しコレ図鑑
神様の御名前でアートする
相島 葉月

16 ふらりミュージアム
国立インド映画博物館
飯田 玲子

17 世界の「乗っちゃえ!」
砂の島のゲートキーパー
髙橋 絵里香

18 だって調査だもの
いただきもの、ありがたし
神野 知恵

20 ぱくっ!とフィルめし
山の上で味わう海の干物
康 陽球

21 今月号の地図・編集後記

特集

夜店に行こう!

日の光が弱まるにつれ、まばゆさを増す露店の人工照明
表と裏、日常と非日常、聖と俗、秩序と混乱、合法と不法……
対立する二つのあわいを照らし出す
更けゆく夏の夜ははかない

子どもだけの夜遊びも許されるホーエーとヨミヤ

厚香苗　大東文化大学 准教授

ヒラビって？

一九七五年に東京都墨田区で生まれて、江東デルタ地帯を転居しながら育ったわたしの記憶では、昼夜を問わず道端で物を売っているのは、一九八〇年代までは当たり前の風景の一部で、露店商は「テキヤさん」と言われていた。

住まいの最寄り駅だった国鉄亀戸駅前には、いつでも甘栗を焼く露店の甘い香りが漂っていた。駅前などで、いつも商売をする露店を、テキヤの隠語でヒラビ（平日）とよぶ。このことを大学の卒業論文作成のために、テキヤさんに聞き取り調査した際に初めて知った。ほかにもテキヤ社会のさまざまな業界用語や慣習を教えてもらった。民俗学では伝承を追い求めて地方に行ったり、故老を訪ねたりする。しかし自宅から自転車で通える東京の片隅で働く人たちのあいだにも、未知の豊かな伝承世界が広がっていた。

夏の露店の定番「つがるの味、りんごアイス」100円
（青森県 弘前市 土手町、2004年）

夜店にはアセチレンランプ

ヒラビとは異なり、おもに夜、周期的におこなわれるのが縁日だった。縁日とは本来、神仏と縁を結ぶと篤いご利益が期待できる日である。参拝客が集まるので、参道に露店が並んで市ができる。わたしの周辺では、その市のことを指して、ただ縁日といっていた。大きな寺社の縁日は昼からやっているが、稲荷や地蔵などの小祠の縁日はだいたい夜市で一七時ころから始まる。これをテキヤはホーエー（法会）とよぶ。

わたしが古本屋で購入した、浅草の石川カーバイト店発行『全国縁日案内関東之巻』という小さな本は、「伊豆越後以北の諸国と北海道及び樺太」の縁日の所在を「全国各地の神農会会長」らの協力を得て調べてまとめた本で、昭和四年発行のなんと二一版（！）である。初版は大正八年に出ている。カーバイトは夜店で使うアセチレンランプの燃料だから、夜店の必需品を売る店が、お得意様のために作った本が大ヒットしたのだろう。神農会とはテキヤ集団の異名である。ホーエーを巡回するテキヤは、このようなガイドブックも利用して商いの計画を立てていた。

「なわばり」のなかの子どもたち

縁日は子どもだけで行くことが許される夜遊びの機会で、子どもたちはテキヤ集団に見守られていた。テキヤ集団は慣習的な勢力範囲「なわばり」をもち、その構成員は少なくとも、なわばりの範囲内では地域住民から信頼されるように努めていた。テキヤ集団は難儀な人生を歩んでいる者も受け入れる。常日頃、社会からの疎外感に苛まれているようなテキヤも、自集団のなわばりでは子どもを見守る大人になる。その責任感は強く、人は人から信頼されれば、信頼に応えようとするものだとわたしはテキヤ研究から学んだ。

熊野宮のヨミヤ（7月19日18時53分）
（青森県 弘前市 茜町、2005年）

東京のテキヤ調査の後には、夏に青森県弘前市周辺を巡回する夜市、ヨミヤ（宵宮）の調査も手掛けた。ヨミヤの露店商たちは、自分たちはテキヤではないと認識していたが、ヨミヤにも子どもたちが津軽地方の短い夏を楽しむために、浴衣を着て遊びに来ていた。

二〇二四年三月四日、久しぶりにかつて足しげく通った町中の小祠、江東区千田子育地蔵と墨田区東向島子育地蔵尊を再訪した。どちらの子育地蔵でも縁日は絶えていて時の流れを感じた。津軽のヨミヤは今でも続いている。

右頁：乳井神社のヨミヤ（8月2日18時10分）
（青森県 弘前市 乳井、2005年）

東京都現代美術館開館で「美術館通り」になった通りの子育地蔵縁日（東京都 江東区 千田、1997年）

金箔を仏像に貼り、娘を水に落とす

津村文彦（つむらふみひこ） 名城大学 教授

左頁：ラムウォンの舞台は人があふれてディスコのように
（写真はすべてタイ チョンブリー県、2024年、伊東忠洋撮影）

表向きには、徳を積みに

「タイの夜店」というと、カラフルなテントが所狭しと並ぶナイトマーケットや、中華料理の屋台で賑わうヤワラート通りを思い浮かべるかもしれない。しかし、むかしながらの夜店といえば、寺祭り（ンガーン・ワット）の夜店である。

寺祭りは各地で開催されているが、あまり外国人観光客には知られていない。例えば、水かけ祭りで有名なソンクラーンや水辺に灯籠を流すローイクラトンは、全国イベントでタイ政府観光庁も積極的に宣伝するが、寺祭りは寺ごとのスケジュールで開催される。その寺の特別な仏像や仏塔、あるいは初代住職など特別な僧侶の命日に関連して日程が決められ、乾季の農閑期（一一月から五月まで）に、三日から一週間ほど開かれる。

寺祭りに行くのは、タムブン（徳を積むこと）が表向きの目的だ。寺で礼拝したり、食べ物や日用品、お金を寄進したり、貧しい人や動物を助けたりすると徳を積める。徳を積むと、来世の生まれ変わりが良くなったり、亡くなった近親者の転生を助けたりできる。寺祭りでは、屋外の仏像に花と線香と蠟燭をお供えし、像に小さな金箔を貼り付けてタムブンをする。また本堂では僧侶が参拝者に聖水を振りかけ、手首に聖糸を巻き付け、人びとの安寧を祈る。

ライトアップされた寺院で夜店が開かれる

仏像に金箔を貼って徳を積む人びと

踊る男女、悲鳴の上がる観覧車

境内には多くの屋台が立ち並ぶ。ソーセージや串焼き、伝統菓子、昆虫フライなどの定番料理はもちろん、タイ風にアレンジされた寿司屋台も人気がある。一個一〇バーツ（約四〇円）ほどで、日本の寿司の半分ぐらいの大きさ。サーモンや卵焼きのほか、あまりにカラフルな魚卵や海藻には少し勇気が必要だ。これら屋台は、寺にお金を払って区画を借りて出店する。店を出すことも寺への寄付、タムブンにつながる。

野外映画、影絵芝居や音楽劇リケーの上演のほか、男女が輪になって踊るラムウォンは子どもから中高年まで舞台に上がる。観覧車やメリーゴーランド、ミニ電車などの乗り物は子どもたちに大人気だ。ネオンが光る観覧車は、店番の気分次第でグルグルと何周も回る。思った以上に早く回転するので、誰かが乗り降りするのに急停止すると、観覧車のゴンドラが一斉に激しく揺れて悲鳴が上がる。またタイのピー（お化けや精霊）がモチーフのお化け屋敷や、作り物感が尋常でない半人半蛇の蛇女や白いカラスなどを展示する「ミアグー（蛇の妻）」という見世物まであらわれる。

上：昆虫フライを売る屋台
下：寺の敷地内で観覧車がきらびやかに輝く

射的や風船ダーツ、ボール当てなどは、お菓子やぬいぐるみが景品だ。的当て系では「水に落ちる娘（サウノーイ・トックナーム）」なるものも。台の上に若い女性が座っていて、的にボールが当たると、台が傾き女性が水のなかにドボンと落ちる。そこが寺の境内であることを忘れてしまうほど混沌とした空間が広がっている。

寺祭りの懐かしさ

タイの人びとは寺祭りに懐かしさを感じつつ訪れているようだ。「ミアグー」のような出来の悪い偽物に刺激を感じなくなり、野外映画でなくスマホで最新映画を見ることができる。かつて祭りでしか食べられなかった甘い菓子は、セブン-イレブンで簡単に手に入るし、男女の出会いもラムウォンの輪の外に広がっている。しかしそんな時代にも危なっかしく回る観覧車は、人びとのノスタルジックな思いを紡ぎつつ、寺祭りを照らし続けている。

ラマダーンの絢爛たる夜と日常

近藤 文哉（こんどう ふみや）　明治大学 研究推進員

ファヌースの夜店。ファヌースとともにさまざまな電飾も販売される（2024年）（写真はすべてエジプト ルクソール）

イスラーム暦九月のラマダーンがイスラーム教徒の断食月であることはよく知られている。また、この時期のエジプトでは、ファヌースとよばれるブリキ製のランタン（現在は木製も多い）も有名だ。インテリアショップや玩具屋、電気店がファヌースを店先で売るようになり、一部地域では特設市も形成される。

ファヌースは、一見、ラマダーンという非日常を代表するモノである。しかし同時にファヌースは、非日常と日常の分かちがたさも教えてくれる。例えば、ファヌースを製造・販売している人びとにとって、ラマダーンは祝祭日でありながら繁忙期でもあり、日常の労働との連続のなかにある。

二〇二四年三月一日のラマダーン直前のルクソール市では、かつて日本で流行した「デコ電」（デコレーションされた携帯電話）を想起させる装飾のファヌースが販売されていた。その店内では、ふだんであれば作業をしない午後八時という遅い時間にもかかわらず、職人の女性が黙々と「デコファヌース」を作り続けていたのが印象的であった。また、意匠に世相が反映されることも多い。イングランド・プレミアリーグのリヴァプール所属でエジプト国内で圧倒的人気を誇るサッカー選手、ムハンマド・サラーの描かれたファヌースはその典型であろう。

このようにファヌースには、現地の人びとのたくさんの日常が積み重なっている。その積み重ねこそが、ラマダーンの絢爛（けんらん）たる夜を印象深くしているのである。

右：グルーガンを用いてファヌースを「デコる」現地の女性（2024年）
左：サッカー選手ムハンマド・サラーの描かれたファヌース（2018年）

金魚救い

新海 拓郎（しんかい たくろう）　民博 外来研究員

ガラス製の金魚玉に金魚を泳がせて、手に持ったり、軒端に吊るしたりして眺めていた
鳥高斎栄昌《郭中美人競 角玉屋若紫》18世紀後半（メトロポリタン美術館蔵）

唐代の詩人、于良史は五言律詩「春山夜月」のなかで「水を掬すれば手に月在り」と詠んだ。夏の夜店ならば、「水を掬すればポイに金魚在り」とでも詠めるだろうか。

読者のなかには縁日ですくった金魚を家で飼ってみたという経験をもつ方も少なくないだろう。小さな水のなかをたゆたう金魚は江戸のころより人びとに涼や癒しを与える存在であった。江戸時代には金魚玉、ひとむかし前なら金魚鉢、そして、最近は陶器のなかを泳ぐ姿を上から見て楽しむどんぶり金魚。容器こそ違えども金魚を愛でるという愉悦は今もむかしも変わらない。

金魚すくいの屋台を泳ぐ金魚がとりわけ弱いことはない。あまたある金魚の品種のなかには土佐金や、らんちゅうなどの飼育の難しい品種もいるが、金魚すくいにはとても飼いやすい和金という品種がおもに使われる。また、無選別の出目金や琉金なども混ぜられており、もしかしたらあなたの琴線にふれる金魚に出会えるかもしれない。

金魚すくいのポイ

コイの仲間である金魚は胃を持たない。そのため、えさを消化するのがとても苦手である。家に連れて帰ってきたならば、まずは「えさをあげたい」と思うのが親心であろう。しかし、最低でも二日程度は絶食させることが長生きさせる秘訣である。魚の調子がすぐれないときには「エサ止め（一時的な餌やり中止）」これはどんな魚種であっても養殖の現場では鉄則である。

さあ、想像してみよう。何度も何度もたくさんのポイに追われた果てに、長旅を経てお引っ越し……、ストレスで衰弱しきった状態である。人間だって風邪で寝込んでいるときには食事を抜くでしょう。えさを食べている姿が見たいという気持ちをぐっと抑えて、しばらくはけなげに泳ぐ姿をそっと眺めていてもらいたい。

たった一枚のポイで掬った一匹の金魚なのだ。今度はあなたの知識ひとつでかけがえのない生命（いのち）を救ってほしい。

お祭りの屋台の金魚すくい（大阪府 吹田市、2017年）

特集

夜店に行こう！

イスタンブルの露店に咲く花々

岩谷彩子（いわたにあやこ）　京都大学 教授

通りを彩る露店の花々（2018年）
（写真はすべてトルコ イスタンブル）

再開発が進む大都市イスタンブル。都市の治安や秩序維持の名目で露天商に対する管理が厳しくなるなか、かつては通りに無数にあった靴磨きや露店が少なくなっている。均一化していく都市の風景に、彩りを与えているのは、露店に咲く色とりどりの花々だ。トルコの国花、チューリップをはじめ、四季折々の花々を人びとは手軽に通りで購入し、贈り合う。花を売るのは、ヨーロッパではロマ、トルコでは「チンゲネ」とよばれるロムやアブダルの人びとだ。ロマはインドから世界に離散したとされる移動民で、アブダルはトルコやシリアで移動生活を送ってきた。第二次世界大戦後すぐ、彼らは野山からデイジーなどの花を摘んできて、タクスィム広場で売り始めたという。花屋がまだ少なかった当時、花を売るのは九割が彼らであり、現在も彼らの多くが露店で花を売っている。

花屋は眠らない

一日中、人の往来が絶えない、イスタンブルの中央に位置するタクスィム広場。その一角を彩る花屋もまた、眠らない。夜も露店に並ぶ花々は、街の安全と安寧を見守ってくれているようだ。二〇一八年三月、花屋の店頭には、ロムの店主の孫にあたる一六歳の青年が立っていた。店頭では一一種類、店内には六種類の花を売っている。花屋を手伝って四年になるという彼は、午後一一時から朝まで店頭に立つという。彼と一緒に店先にいたのは、雇われたシリア人の男性だ。このころ、内戦で多くのシリア人がイスタンブルに流れてきていた。都市の居住地に流入してきた彼らをよく思わない人もいるなか、露店は出自を超えて人びとを出会わせもする。

朝。タクスィム広場に、隣の地区に住む店主たちが戻ってきた。かつては一八店あった店も、今では九店になってしまったという。八時半には、花の競売場からバスが迎えにやってくる。広場から一八キロ離れた競売場まで三〇分。九時半には約五〇人の人びとが競売場に集まっていた。簡単に競売場で朝食をとった後、人びとは会場に集まる。新鮮な花がベルトコンベアーで次々に運ばれてきて、それを観ながら参加者はボタンで値段を付けていく。トルコの花の競売では、下げぜりと上げぜりの複合型で、素早く花の値段が決まっていく。競売がある日は毎日来ているというYさん（五八歳女性）は、父の後を継いで一九八〇年からタクスィム広場で花を売っているという。この日競売で最初に仕入れた花は、バラ、マーガレット、チューリップ、ヒヤシンス、ユリなどで、税込みで約五七〇リラだった。

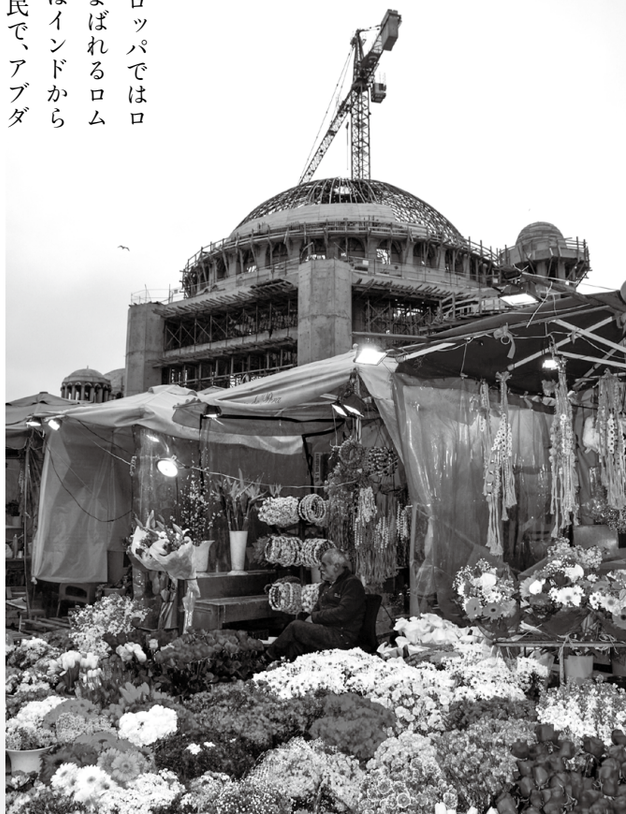
花の競売場（2017年）

移動しながら根を張る花屋

トルコで露天商は行政と警察の管理下にある。警察から出店許可をもらい、彼らは定めた場所でのみ出店が許される。このころ、タクスィム広場にモスクを建築する工事が進行しており（二〇二一年五月に完成）、花屋は移転を迫られていた。二〇一八年三月一九日、イスタンブル市の職員がやって来て彼らを強制的に移動させようとしたが、花屋たちは弁護士を呼び、なんとかその場を収めた。この衝突はニュースにもなり、ロムの代表が中央政府に陳情に出かけることになった。

花屋の生産者組合を二〇一七年に設立した男性は言う。「次に何が来るのか、花屋はいつも恐れている。だから組合を作ったんだ」。タクスィム広場の花屋には歴史があり、彼らは毎月五〇〇リラ（二〇一八年三月現在、約一万四〇〇〇円）の占有料を区に支払っている。それでも場所は選べない。以前は通行人がより足を止めやすいタルラバシュ通りに露店を出していたが、再開発のため広場に移動させられ、今度は広場の隅のガラスの店舗に移されようとしていた。どこに移されようとも、その場でなんとか根を張ろうとする花のように、露店もイスタンブルの街角で今日もまた生き延びている。

夜のタクスィム広場を照らす花屋（2018年）



建設中のモスクと露天の花屋。再開発で変わりゆく都市の風景（2018年）

夜市台湾

王韶君（おうしょうくん）　財団法人鄭南榕基金会 特任研究員
翻訳　若松大祐（わかまつだいすけ）　常葉大学 准教授

台湾の夜市は世界に名を馳（は）せ、遠く外国からも観光客がやってくる。人びとが夜にモノを売り買いする。ちなみに、台湾の中国語で「夜店（イエディエン）」はスナック、ラウンジ、クラブといった、いわゆる「夜のお店」を意味する。日本語の夜店に当たるのが「夜市（イエシー）」である。

メインは「牛墟」

清代の嘉慶（かけい）、道光（どうこう）年間（一九世紀前半）の台湾では、寺廟の門前に定期市が開かれていた。（そのため、現在の夜市の多くも寺廟を中心に形成されている。）当時は農業社会であり、電力は普及していなかったから、人びとが市場を開くのは基本的に昼間である。主要な市場は牛の取引所「牛墟（グーヒー）」であり、そこで生活必需品の販売もあった。現在の夜市のように趣味や娯楽の商品を扱っていたのではない。

続く日本時代（一八九五～一九四五年）になると電気設備が登場したものの、商売人を始めとする多くの人にとって電気設備は高価である。そのため、台北や台南などの都市部、さらに基隆（キールン）や宜蘭（イーラン）などの沿海部にしか、夜市はなかった。

夜市の出現

第二次世界大戦後も定期市は開かれ、それまで以上に露天商が並ぶ。多くはやはり昼間に開かれた。というのも当時の台湾では戒厳令が敷かれ、政府が人びとの夜間外出を禁じたし、電気使用を制限したためである。移動可能な屋台が増えすぎると、公衆衛生上の問題も増える。市街の景観も悪くなる。そこで政府はエリアを指定した。商売人たちはエリア内に屋台を並べた。夜市の発生は、民間人が発電機を使うための法規がようやく制定された一九七八年以降のことである。一九八〇年代の初めごろから、台湾の各地で夜市が続出する。

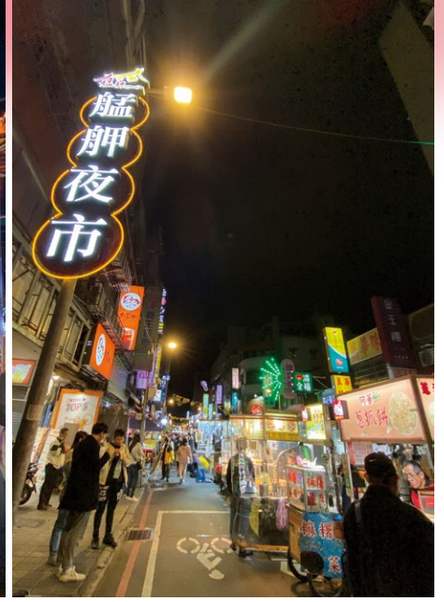
夜市ごとにそれぞれ特徴があり、営業時間や立地もさまざまである。次の表のように三つに分類できよう。

類型	特徴
固定型	屋台の場所と時間は決まっている 年中無休
流動型	屋台の場所が決まっていない 毎日営業でない 大台北圏以外の都市に多い
学区型	大学の付近に多い 主要な客は学生である

夜市のビジネス

夜市のビジネスは薄利多売である。人波が押し寄せてきてこそ儲かり、安価と低コストが優先される。だから客にとってデメリットもある。例えば商品は品質がそれほど良くなかったり、模造品であったり、食品は材料が新鮮でなかったりもする。夜市ではモノを買っても、たいていは領収書を発行してもらえず、いわば保証がない。

饒河街観光夜市で有名な炭焼き胡椒餅



艋舺夜市。屋台は右から台湾式ねぎパイ、台湾式もち

また、夜市は公衆衛生上の問題を抱える。夜市は多くが露天商であり、屋台である。食品も食器も外気に直接さらされる。そして、屋外で洗うことになる。夏に食材を新鮮なまま保つのは難しく、ときに食中毒も起こる。そこで、夜市には大型のゴミ箱が設置された。客は食べ歩くものの、おかげで道路上にゴミが散乱することは減った。

それもご当地食

台湾では四〇〇年にわたって原住民というたびもの移民が集い、現在の多文化社会ができあがった。そのため、夜市にあふれるご当地ものは異種混交である。料理は「熱炒（ルーシャオリィアオリィ）」（台湾式居酒屋）から「日式料理」（日本式料理）まで、はたまた「蒙古烤肉（モングーカオロウ）」（モンゴリアン・バーベキュー）からベトナム生春巻きまで、おやつは台湾式かき氷からドンドゥルマまで。最近は、「新住民」とよばれる東南アジア系移民の飲食文化が、台湾の日常生活に入り込んでいる。バラエティ豊かなので、あなたの舌は満足することまちがいなし。

夜市は、そもそもは地元の人びとの生活を支えるものとして発生した。のちにグローバリゼーションの下で、国際的な観光スポットになった。あなたがどこから来た人であろうとも、夜市に足を踏み入れたら、きっと心も財布もすっかり軽くなるはず。

右：雙城街夜市付近の東南アジア・スーパーマーケット
左：雙城街夜市の屋台での食事
（写真はすべて台湾 台北、2024年）

みんぱく回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/

各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

みんぱく創設50周年記念研究公演

アリラン峠の向こうには ――在日コリアン音楽のこれから

10年をへて再びみんぱくにつどう3組の音楽家たち。3つの国のはざまに生きる彼らの音楽をとおして在日コリアン音楽のこれからを見つめます。

日時　8月25日(日)14時～16時30分(13時30分開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)
演奏　安聖民、李政美、河栄守、金栄実、梁聖睎ほか
解説　高正子(大阪コリアタウン歴史資料館 館長)
司会　福岡正太(本館 教授)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日13時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
7月12日(金)～19日(金)定員80名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付
7月22日(月)～8月21日(水)

「アリラン峠を越えていく」(2014年)から

創設50周年記念みんぱく映画会

「TRIO」

日時　7月13日(土)13時30分～16時10分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
司会　信田敏宏(本館 教授)
参加費　要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要
※事前申込の方へ、当日11時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼一般受付　7月10日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

企画展「客家と日本――華僑華人がつむぐ、もうひとつの東アジア関係史」関連イベント

「一八九五」

日時　9月8日(日)13時30分～16時15分(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品　「Blue Brave: The Legend of Formosa in 1895」(2008年)
参加費　要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要
解説　河合洋尚(東京都立大学 准教授)
司会　奈良雅史(本館 准教授)
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
7月29日(月)～8月2日(金)定員70名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付
8月5日(月)～9月4日(水)

「一八九五」

みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

点字体験ワークショップ

日時　7月13日(土)、8月10日(土)12時～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

MMP 20周年記念ワークショップ

さわる絵をつくろう！

日時　8月3日(土)12時～16時(最終受付15時30分)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

やってみよう！～わくわく体験 in みんぱく 2024

日時　8月4日(日)10時～15時30分(最終受付各体験に応じて)
会場　本館1階エントランスホール、第3、7セミナー室
※申込不要、参加無料、当日随時受付

はじめの一歩 やってみよう！ ミラー刺繍

日時　8月11日(日)11時～16時(最終受付15時30分)
会場　本館1階エントランスホール

ビデオテーク新番組

本館2階インフォメーション・ゾーン(無料)のビデオテークブースとみんぱくシアターにて公開中。

番組番号	7253
タイトル	ラージャスターンのガンゴール祭礼
監修	三尾稔（本館 教授）

巡回展

ユニバーサル・ミュージアム ――さわる！"触"の大博覧会 直方巡回展2024

本館で2021年秋におこなわれた特別展。2022年春には岡山で初の巡回展が敢行され、2回目となる今回は、福岡県直方市で開催します。

会期　7月6日(土)～9月16日(月・祝)
会場　直方谷尾美術館(福岡)
主催　公益財団法人直方文化青少年協会
共催　国立民族学博物館

驚異と怪異 ――想像界の生きものたち

会期　9月14日(土)～11月17日(日)
会場　国立アイヌ民族博物館 特別展示室(北海道)
主催　国立アイヌ民族博物館、国立民族学博物館、公益財団法人千里文化財団

国立民族学博物館 広報係
電話　06-6878-8560（9時～17時、土日祝を除く）　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form/

本の紹介

川瀬慈 著
『見晴らしのよい時間』
赤々舎　2,750円(税込)

パンデミック期間に著者が文芸誌や新聞等で発表してきた作品を中心に構成されています。詩、小説、随筆、対話等、さまざまな語り口を通して、<イメージの生命>に迫ります。画家の平松麻さんがドローイングによって本書のお話に息を吹き込んでくれました。

菅瀬晶子 文、平澤朋子 絵
『月刊たくさんのふしぎ(2024年6月号) ウンム・アーザルのキッチン』
福音館書店　810円(税込)

イスラエルの港町ハイファに住む、アラブ人キリスト教徒女性のライフ・ヒストリーを、一週間の出来事から解きほぐします。ユダヤ人国家に包括されながらも、宗教的アイデンティティを守る人びとの暮らしを描きます。

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり（定員80名）

第547回
7月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
内戦の過ごし方――ソロモン諸島 ガダルカナル島の人びとの紛争経験
講師　藤井真一(本館 助教)

【申込期間】
▶一般受付　7月17日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第548回
8月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
ネパールの「吟遊詩人」 ――映像音響資料の当事者との共有
講師　南真木人(本館 教授)
みんぱくが所蔵する過去の写真、映像、音源を当事者と共有する事業を進めています。特別展「吟遊詩人の世界」に先がけ、この事業の過程で明らかになった、ネパールの「吟遊詩人」ガンダルバについてお話します。

ダン・バハードゥル・ガエク氏
(ネパール ポカラ、2016年)

【申込期間】
▶友の会先行受付
7月12日(金)～19日(金)(定員80名)
お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▶一般受付　7月22日(月)～8月14日(水)

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

本館の研究者が「みんぱくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。
※会場　本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券（一般580円）
※イベント参加費は不要

7月28日(日)14時30分～15時
発掘調査現場における デジタル技術の活用 ――ウズベキスタンでの事例
話者　寺村裕史(本館 准教授)

8月11日(日)14時30分～15時15分
みんぱく所蔵の ヒエログリフ碑文を読む ――ロゼッタストーンには 何が書かれているのか
話者　永井正勝(本館 特任教授)

友の会　講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先　国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話　06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX　06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp　https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates

友の会講演会

参加形式①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

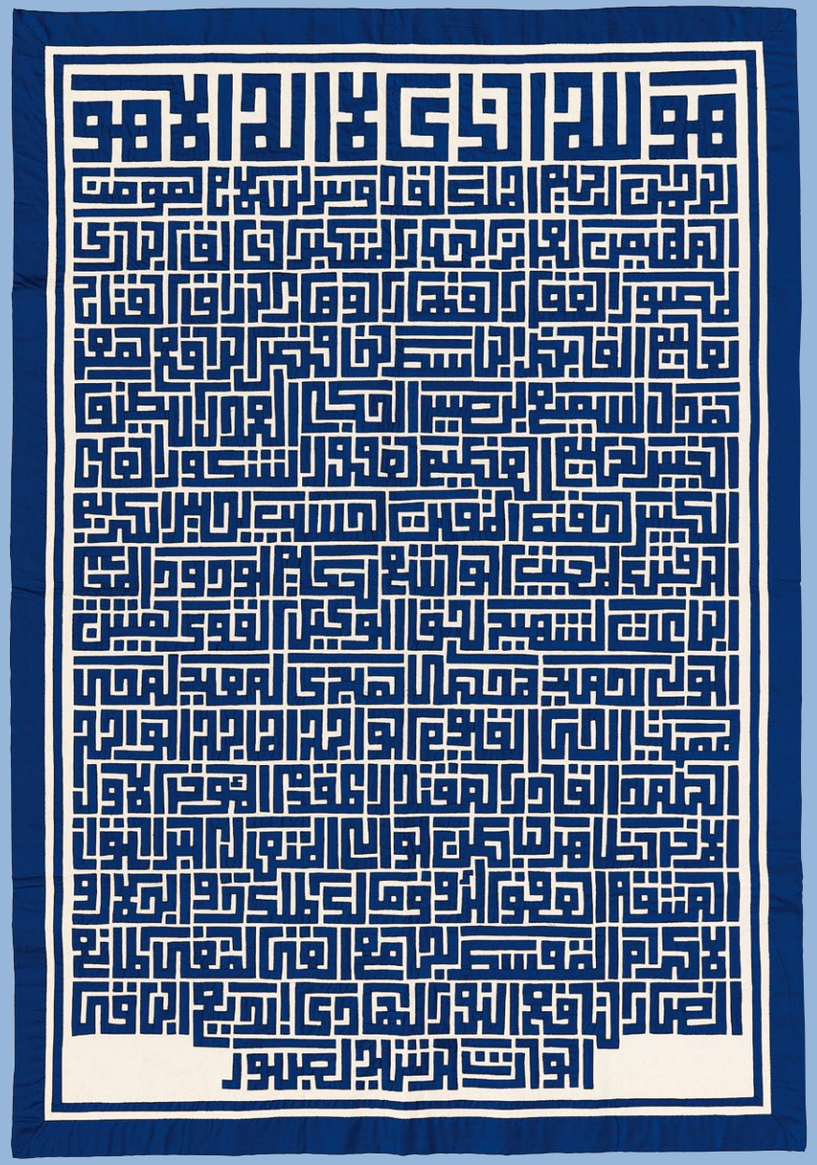
第550回　7月6日(土)13時30分～15時
人類にとって宗教とはなにか
講師　竹沢尚一郎(本館 名誉教授)

第551回　8月3日(土)13時30分～15時
古代エジプトの書字文化 ――「刻む文字」と「書く文字」の世界
講師　永井正勝(本館 特任教授)
古代エジプト文明の栄華を支えたのは文字の存在でした。古代エジプトの文字は、神や王に捧げるべく石材などに刻まれたヒエログリフと、書記が記録のためにインクと筆で記したヒエラティックとに大別されます。このように古代エジプトでは「刻む文字」と「書く文字」とが併存されていたのです。本講演ではそれらの文字の違いを紹介するとともに、民博所蔵のヒエログリフ碑文を解説します。
※講演会終了後、講師とともに本館展示にて見学会をおこないます。(要会員証もしくは展示観覧券)

東京講演会

友の会会員：無料、一般：500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

第137回　7月27日(土)13時30分～15時
サウンド・アーカイブと民俗芸能の再活性化 ――みんぱく所蔵東洋音楽学会資料を事例として
講師　植村幸生(東京藝術大学 教授、本館 特別客員教員)
会場　モンベル渋谷店5階サロン
みんぱくは、東洋音楽学会による1960～70年代の日本民俗音楽のフィールド録音を大量に保管しています。わたしはその中で三匹獅子舞という民俗芸能の音源を現地の伝承者に聴いていただく「還元」を進めています。60年ぶりによみがえる録音は芸能の継承や復興に貢献できるでしょうか。そこからサウンド・アーカイブとしての博物館の役割を展望します。



パッチワーク（神の美称）
標本番号｜H0327988
地域｜エジプト
サイズ｜139.5cm×96.5cm
2025年春の企画展にて展示予定

✦ 推しコレポイント ✦

アラビア書道の原型とされるクーフィ書体は幾何学的な形が特徴的。デザイン性の高さでは、ヨーロッパのハイブランドに引けをとりません。

推しコレ図鑑

神様の御名前でアートする

相島 葉月（あいしま はつき） 民博 准教授

99の神の美称

ムスリムにとって絶対であり、唯一無二の信仰の対象である神には、聖典クルアーンに由来する99の御名（みな）がある。例えば、第1章、ムスリムが日常的に唱える開扉章（かいひしょう）で、神はアル＝ラフマーン（慈愛あまねき者）、アル＝ラヒーム（慈悲深き者）とよばれている。神は罪人を赦（ゆる）し（アル＝ガッファール）、声なき声に耳を傾ける（アル＝サーミイ）のである。神を想うことはムスリムの信仰実践のひとつであることから、エジプトの首都カイロの街は、神の美称（びしょう）を書いたモノであふれている。

もう1枚はフランス大使が

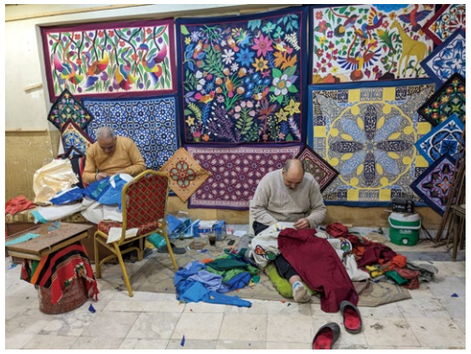
このパッチワークは民博の資料収集でカイロを訪れた際、多様な手工芸の工房があるイスラーム地区で見つけた。「ヒヤミーヤ」とよばれる、綿製の布をキャンバス生地に縫い付けた、エジプトを代表する伝統工芸品である。1965年までこの地区では、キスワ（メッカのカアバ神殿にかけるクルアーンの章句を刺繍（ししゅう）であしらった布）も製作されていた。

アラビア書道のクーフィ書体で99の神の美称が書かれている。アラビア語は右から左に書く。1行目の「フワ・アッラー（彼はアッラー）」から始まり、最後は「アル＝サブール（忍耐者）」。神の御名（みな）を間違える訳にはいかない。

工房主のターリク・アル＝サフティ氏によると、熟練の職人をもってしても製作に半年ほど要した大作だという。同じデザインは2枚しかなく、もう1枚は在エジプトフランス大使が購入したと誇らしげに語った。パッチワークと聞くと女性の作家を連想する人もいると思うが、工房で会った職人は全員男性だった。若者は手工芸に興味がないことから、次世代の担い手を探すのが難しいという。

店の奥からこの作品が出てきたとき、精巧な手仕事の美しさに圧倒された。自分用に1枚欲しくなり、自宅のどこに飾ろうかとぼんやりと夢想しながら帰った。神様の御名前（おなまえ）それ自体がアート、というのがアラビア書道である。

この資料は2025年春の企画展「点と線の美学――アラビア書道の世界」（仮）での展示を予定しているのでお楽しみに。



ヒヤミーヤの工房（エジプト カイロ、2023年）

銀幕スターにわたしもなれる!!

国立インド映画博物館 （マハーラーシュトラ州 ムンバイ）

飯田 玲子（いいだ れいこ） 金沢大学 講師

インド映画といえば歌舞踊シーン。ところが、歌っているのは、往々にして俳優ではない。プレイバックシンガーとよばれる別の歌手が歌い、両者が絶妙に組み合わさり、あの歌舞踊シーンが生み出されているのである。わたしはここ数年、両者のあいだにある身体の結びつきに深い関心を寄せている。

今年一月、ムンバイでプレイバックシンガーに会ってインタビューをした。その帰り、タクシーの運転手とインタビューの話やインド映画の話で盛り上がり、国立インド映画博物館に行くことを勧められた。その日は他に予定もなかったため、せっかくなので足を運んでみた。

総工費一四億ルピー（日本円で約二五億円）をかけて二〇一九年に開館した同博物館は、二つの展示館からなる。一つは、一九世紀のインド・サラセン様式の建築物を改修したもので、インド映画の歴史について展示している。インド映画の歴史は、初の国産長編映画「ハリシュチャンドラ王」（一九一三年）に始まる。やがて演出や編集、流通までの全体を総責任者が統括し、各製作工程は分業化させる「スタジオ・システム」が登場した。また各州の言語で製作された地域語映画も生み出された。これらインド映画が辿ってきた道が、豊富な写真や当時の機材とともに展示されている。

上：サラセン様式の展示館入口
下：ミッチェル社のNC型35ミリカメラでの撮影を再現した展示

もう一つの展示館は今日のインドを象徴するかのような現代建築である。こちらでは、映画が完成するまでの過程や、最新の撮影・編集に関する情報が、製作現場で実際に使用されている機材を用いて説明されている。

わたしがもっとも興奮したのは、プレイバックシンガーを擬似体験できる展示だった。五つの映画の歌のうち一つを選択すると、画面上に、俳優の口だけが動いている映像が映し出される。その口元にあわせて歌うと、歌声が録音されて映像に重ねられ、映画のワンシーンとして再生される仕掛けになっている。

わたしもプレイバックに挑戦してみた。お世辞にもうまいとはいえない吹き替えだったが、ほんの一瞬だけ、銀幕のヒロインになった気分を味わうことができた。

プレイバック体験ができる展示設備
（写真はすべてインド ムンバイ、2024年）

国立インド映画博物館はムンバイのチャトラパティ・シヴァージー・ターミナス駅からバスで約20分。バーチャルでインタラクティブな展示でインド映画の過去、現在、未来をつなぐ。
公式サイト https://nmicindia.com/

砂の島のゲートキーパー

髙橋絵里香（たかはしえりか）
千葉大学 教授

フィンランドの群島地方に暮らす人びとが複数の仕事をかけもちすることはめずらしくない。移り変わる季節に合わせ、農業や漁業、観光業などさまざまな領域を横断しながら働くからだ。

六十代の男性であるヴェッケも複数の仕事をやりくりしている。冬季に用いる灯油のネット販売。音楽のプロデューサー業（彼は八〇年代にロックバンドのギタリストとして活躍していた）。ときおり舟で漁にも出る。そして、島と島をつなぐフェリーの操縦士でもあるのだ。

ヴェッケの暮らすサンドオー、直訳すると「砂の島」に渡るためには、隣の島からフェリーで移動しなくてはならない。島には多くの別荘が点在しているが、年間を通じて暮らしているのは数家族だけだから公共交通はない。そこで私道組合とよばれる住民のアソシエーションがフェリーを運航しているのである。ヴェッケもこの組合の一員なのだが、フェリーの操縦をいちから学んで免許を取り、働き手不足を補うべく、自らも操縦士として働き始めたのだという。

右：砂の島の風景（門田岳久撮影）
左：砂の島のフェリーに乗り込む工事用トラック
（どちらもフィンランド、2021年）

ヴェッケはフェリーの操縦席にノートパソコンを置き、灯油の注文があればすぐさまメールで返信する。停泊中の桟橋へ車がやってくれば、向こう岸まで乗せていく。ひとたびフェリーが動き出せば、対岸に近づくまでは目を離すこともできるから、知り合いが乗っているときは操縦席を降りてあいさつし、さっき乗せたトラックはどこに別荘を作るのだろう、といった噂話（うわさ）に興じる。砂の島の玄関をつかさどるヴェッケは、島の事情通なのである。

無料の公共交通が発達した福祉国家の片隅で、水上の路は今も地域共同体によって管理されている。だが、ヴェッケを含む私道組合の仲間たちは、メディアを通じてフェリーの公営化を国や自治政府に訴えることもしている。いかにも地元民といった風情のヴェッケが名の通ったロックンローラーであったように、群島地域は辺境にありながら、人びとのかけもち仕事で世界ともつながっている。

だって調査だもの

いただきもの、ありがたし

神野知恵（かみのちえ）
岩手大学 准教授

北漢山（プッカンサン）でのムダンの儀礼調査。供物のおさがりで大量の果物をもらった（韓国 ソウル、2012年）

重たいおみやげ津々浦々

フィールドワークは身軽に限る。なるべく荷物は減らしたい。しかし想定におさまらないのが、調査先でのいただきものである。これまで、日本と韓国の各地でたくさんのおみやげをいただいた。この身は一つ、カバンの容量も限られているので、感謝と困惑の気持ちがせめぎあう。

韓国ソウルのムダン（シャーマン）の儀礼調査では、供物のおさがりとして、立派な梨やりんごを大量にもらって歩けなくなり、タクシーに乗ったことがあった。地方ではキムチに味噌、果実酒、酢、魚醤、ごま油、はちみつなどをよくもらうが、瓶詰めの液体物がまたとにかく重い。はちみつのために本を買うのを諦めるなんてことも。そうやって苦労して持ち帰ったものはたいていとても美味しく、その地の風土や人びとの特徴がよくあらわれていて話の種になるので、ありがたいことに違いはないのだが……。

日本では、石材加工店で石の見本をもらったことがある。石の塊を背負って歩くのは苦行以外のなにものでもないが、ありがたい気持ちで重みに耐えた。今なら、まよわず郵便局に行って家に送っている。

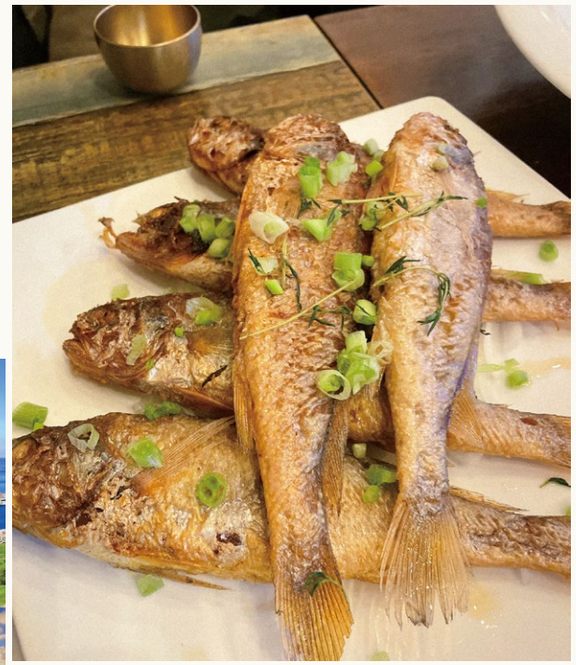
また、いわゆる「オカン・アート」の類もよくもらう。手作りの巾着袋、毛糸のたわし、ビニール紐で作った人形のキーホルダーなど。小さいものなら一つはいただくのだが、最近日本の地方では、竹筒にドリルで穴をあけて陰影を出す竹灯籠細工が流行している。玄関にあふれんばかりの作品が飾られているお宅で、どれでも持って帰っていいとお申し出をいただいたが、さすがに丁重におことわりした。

太鼓の師匠に持たせてもらった手作りの食品類
（韓国 全羅北道、2013年）

宵越しのみやげは持たない？

昨年訪れた韓国南部の楸子島の祭りでは、村人のための抽選大会で、イシモチを干物にしたクルビの高級な贈答品セットを当ててしまった。楸子島のクルビは美味で有名なのでとても嬉しかった。しかしナマモノを持ち帰るのは難しいため、翌日、済州島に寄った際に友人の行きつけの店で焼いてもらうことにした。シェフや店の常連さんたちとともに夢中になってたいらげた。済州の人たちも、こんな鮮度の良いクルビは初めてだと驚いていた。我ながらこの選択は冴えていたと思う。

それにしてもこの島の抽選大会は景気が良く、数年前に参加したときは電動自転車が一等賞だった。島の子どもたちに囲まれて、「あんたに自転車が当たったら俺にくれるよね？」と大騒ぎになったのは微笑ましい思い出である。


←↑楸子島の村祭りで当選した高級クルビセットは持ち帰らず済州の居酒屋に持ち込み、全部食べた
（韓国 楸子島、済州島、2023年）

旅人の本音

新潟の瞽女（ごぜ）さん（盲目の女性旅芸人）へのインタビュー資料を読むと、訪問先で米をもらうのはありがたいが、重くて持ち歩けないので換金する。今はできれば現金のほうがいい、などと書かれている。貴重な米を出した人のことを考えると少し申し訳ない気もするが、歩き続ける旅人の心情に、強い共感を覚える。わたしの場合、現金はともかく、いちばん嬉しいのは海藻や煮干し、お茶や唐辛子などの乾物類である。軽くて日持ちするうえ、人にも分けられるし、土地の特徴も出ている。歩き旅のフィールドワーカーにおみやげを渡す場合は、ご参考までに。

イラスト：神野知恵

山の上で味わう海の干物

康 陽球（カン ヤン グ）　国立民族学博物館 外来研究員

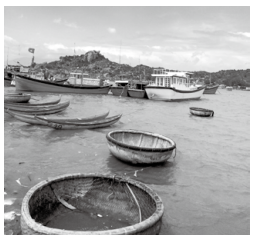
見た目は地味だが、格別にうまい。料理の名は知らない。唐辛子、ニンニク、エシャロットを油とともに熱して香りを立たせて、軽く炙（あぶ）った干物の魚と一緒にすり鉢ですり潰す。最後に魚醤（ぎょしょう）ヌクマムを少々。ご飯が進むおかずのできあがり。

この料理の主役である干物は、ベトナム南中部ニントゥアン省にある海岸沿いの魚市場で買ったものだ。同省の沿海地域は、かつてベトナムの中部と南部で繁栄した交易国家チャンパーに起源をもつチャム人が多く住んでいることで知られている。さらに海からバイクで北西へ1時間行くと、低山が連なるバクアイ県があり、チャム人と宗教・経済・政治的に密接な関係にあったラグライ人が住んでいる。わたしは2016年からそこで、ラグライ人の生活や慣習について調査をしている。この名もなき料理は、調査をはじめて間もないころ、よく作っていたお助け飯だ。

ラグライ人の村に住み込むことを行政から許されず、わたしはバクアイの中心部にある長屋に寝泊まりし、バイクで15分ほど離れたラグライ人の村に通いながら調査をしていた。その長屋にはわたしのほかに、沿海部から山地の学校や病院に働きにきている人たちが住んでおり、このレシピは隣に住むチャム人の看護師さんから教わったものだ。

長屋には冷蔵庫がなく、食料調達は近所の市場頼みなのだが、昼過ぎには閉まってしまう。調査が長引き夜遅く帰宅したときに役立ったのが干物だった。

しかし、調査も後半になれば、この一品を作ることもなくなっていった。冷蔵庫を手に入れたし、ラグライの人びとに、食事をごちそうになったり、野菜や果物をわけてもらうことも増えたからだ。何より、沿海部から持ち込んだ干物は山の人びとに喜ばれ、お裾わけをしているうち、あっという間になくなってしまった。かつてわたしの腹を満たしてくれていた干物は、住み込み調査ができないわたしと調査地の人びとをつなぐものになっていった。この名もなき料理は、そんなことを思い出させてくれる一品である。



左上：沿海部から調査地へ向かう道。車が少なく心地いい
右上：干物をよく仕入れていた魚市が立つ漁村ナイ村
下：干物をすり潰した名もなき一品。唐辛子の鋭い辛さがポイント
（写真はすべてベトナム ニントゥアン省、2017年）

月刊みんぱく 2024年 7月号

第48巻第7号通巻第562号　2024年7月1日発行

編集·発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　山中由里子
編集委員　樫永真佐夫(編集長)　河西瑛里子
黒田賢治　中川理　奈良雅史　松本雄一
制作·協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　株式会社 研文社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C028818
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JFPM P-B10271

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読
本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会
みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。
電話 06-6877-8893(平日9:00～17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会

今月号の地図

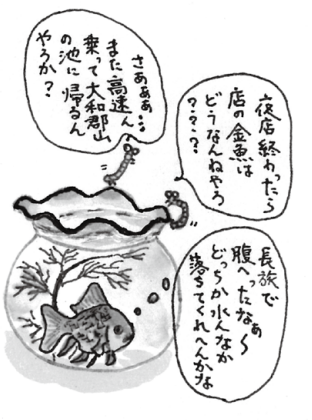
編 集 後 記

日本の夏はますます暑い。日差しがゆるみ、暑さが和らいでからでないとブラブラする気になどなれない。だから、「夜店、サイコー!」 そんなノリで本特集を組んだ。

さて、20 世紀末、わたしがいたベトナム山間部の村に公共の電気はなかった。村の夜は明らかに昼とは異なる世界であった。ところが 21 世紀初めに電気が送られてくるようになると、たちまち「夜」が村から閉め出された。それほど電光の力は圧倒的だった。変化が一気に押し寄せた当時を思い出すと、近世江戸に発生した夜見世が明治以降電光の普及とともに日本中に広まったことが、いかにも納得できる。夜店はいわば電光の申し子なのである。

そのうえで本特集を読み直すと、露店が並ぶ夜店は各国で、昼と夜、双方の世界に対してなんだか自立している。そもそも市という商業空間が「無縁」の原理に依(よ)っているからだろうか。夜店はいつも乱世的。未来へと開かれている。

(樫永真佐夫)



次号の予告 8月号

特集「ワンダー! 客家」(仮)

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

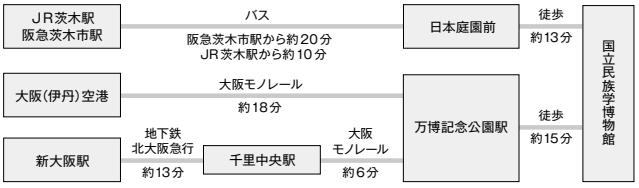
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151

開館時間　10:00～17:00(入館は16:30まで)

休 館 日　毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日～1月4日)

観 覧 料　一般 580円／大学生 250円／高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス
本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館友の会 ミュージアム会員で

世界へダイブ!

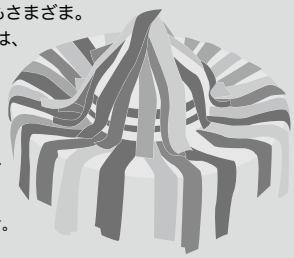
みんぱくを
もっと楽しもう!

ミュージアム会員になると お得なことがこんなにたくさん!

何度でも観覧できる!

住むところが違えば、暮らし方もさまざま。国立民族学博物館（みんぱく）は、世界中の人びとの暮らしや文化を紹介する日本で唯一の国立の民族学博物館です。会員証の提示で、年間何度でも観覧できて、展示やイベントなど楽しみは盛りだくさん。

※特別展は割引料金での観覧となります。



『月刊みんぱく』が届く!

みんぱくの研究者は、経験豊かな「フィールドワーカー」。世界のすみずみにまで足を運び、人びとの暮らしを調査します。広報誌『月刊みんぱく』では展示や催しの情報はもちろん、親しみやすい文章で、研究者たちが現地の人びとの暮らしをお伝えします。イベント情報とともに毎月お手元まで郵送します。

イベントに参加しやすい!

みんぱくでは世界各地の芸能や音楽を紹介する研究公演、貴重な映像を上映する映画会、ワークショップなど、毎月たくさんのイベントを開催しています。観覧券の購入が必要なイベントにも会員証の提示でご参加いただけます。イベントによっては友の会先行受付枠がございます。※参加費が必要な催しもあります。

文化人類学者の話を直接聞ける!

文化人類学研究者が毎月さまざまな地域、テーマについて語る「友の会講演会」で、さらに知識を深めることができます（毎月第1土曜日開催）。特別展や企画展の解説つき見学会も開催しています。

ミュージアム会員で ご利用いただけるサービス

- 本館展示の無料観覧
- 特別展の観覧料割引
- 友の会講演会・東京講演会への参加
- 国立民族学博物館の広報誌『月刊みんぱく』の送付（年間12冊）
- みんぱくミュージアム・ショップでの割引
- みんぱくレストランでの優待
- 万博記念公園周辺施設、提携館の割引

年会費 5,000円（おひとり）

ミュージアム会員への入会方法について

みんぱく館内や書店でのお手続きのほか、郵便局での払込やオンラインでのクレジットカード決済もご利用いただけます。お気軽にお問い合せください。

「国立民族学博物館友の会」（公益財団法人千里文化財団）
〒565-8511大阪府吹田市千里万博公園10-1
TEL 06-6877-8893（平日9:00〜17:00）
FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/about/